

白川研究所便り



目次 ◆ index

創刊号
発行
06.3.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒600-8577 京都市北区等持院北町156-1
電話 075-466-3470
Mail toyomaji@st.ritsumei.ac.jp

挨拶

名譽研究所長 白川 静

白川静記念東洋文字文化研究所の 設立目的と活動

研究所長 長田 豊臣

3

「白川研究所便り」の発行にあたつて

副研究所長 木村 一信

4

白川静記念東洋文字文化研究所の 研究活動予定について

研究員 上野 隆三

3

白川研究所の文化事業活動について

副研究所長 高杉 巴彦

5

説文学と白川文字学

白川 静

7

展観 「白川静の世界」

（二〇〇五年十一・十二月開催の「白川静と立命館展」より）

研究員 芳村 弘道

10

挨拶

名誉研究所長 白川 静

昨年四月、立命館大学内に、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が開設され、関係の各位に種々御厚配御協力を頂き、有難く存じます。ただ御承知のように、研究所はまだ今、末川記念会館の一室を借りて事務所を設けておりますが、研究資料も書架十架分を搬入したのみで、設備も整わらず、十分な活動を開始しえない状態にあります。

しかし研究所として出発した以上、速やかにその目的を明示し、その運営を開始すべきでありますから、昨年十一月より十二月半ばにかけて、この研究所の開設を紹介する展示会を、本学図書館の百周年記念行事と連繋して開催しました。また福井県立図書館内の「白川文字学の室」とも共同で、相互の資料を提供し、第一回は福井県立図書館（十一月十五日～二十三日）、第二回は立命館大学衣笠キャンパス（十一月二十八日～十二月六日）、第三回は立命館大学びわこ・くさつキャンパス（十二月九日～十七日）の三会場に巡回展示し、多くの参加者をえて成功裏に終了、文字学・文字教育についての、内外の関心を高めることができたと信じております。

研究所の活動については、研究発表部門・内外の研究者に対する奨励金の交付など、それぞれその準備作業を進めており、奨励金については、三月末までに、それぞれの研究機関にその成果を問い合わせ、三月末までに、それぞれの研究機関にその成果を問い合わせ、五月頃に表彰を実施したく、諸般の準備を進めております。

研究所内部の研究活動については、組織的な活動は施設の充実を待つこととし、個人的な活動は関係者の間で準備が進められており、年度末にはその大略の報告がえられると思っております。その研究の成果は、論文形式のものは来年度より機関誌を発行して登載し、著作物は適当な出版社に依嘱して出版し、本研究所刊行書の一部として、記録することにしたいと考えています。

本研究所の設置場所も、次年度早々に決定されるはずであり、その決定を待つて、基本図書として予定していたものを納付整理し、研究所としての体制を整え、各関係者の御協力を得て、改めて組織的な活動を開始したいと考えております。研究所としての活動が甚だ延引しておりますが、右の事情御賢察の上、今後とも一層の御協力、御援助を賜りますよう、御依頼申し上げます。初年度も年度末近くになりましたので、その概略を御報告申し上げます。今後一層の御協力をお願い申し上げます。

（名誉教授）



白川静記念東洋文字文化研究所の

設立目的と活動

研究所長 長田 豊臣

「白川研究所便り」の発刊にあたりまして、一言ご挨拶させていただきます。

みなさまご存知の通り、本学名誉教授の白川静先生は、長年にわたり東洋文字文化研究に携わられ、漢字研究の第一人者として『字統』、『字訓』、『字通』、その他多くの超人的な数の学会の流れを変える重要な著書を世に問うてこられました。また、先生は漢字文化圏の衰退による「東洋」という理念や東アジア文化の共有性の崩壊を大変憂慮され、東洋文字文化の普及にご尽力してこられました。こうした高度な研究業績を称えられ、二〇〇四年十一月に文化勲章をご受章されました。先生がこれまで築き上げてこられた業績の高みに、ただただ頭が下る思いを抱くとともに、先生の存在は本学の誇りとするところであります。

その先生の研究成果をもとに、東洋文字文化の教育・普及および研究の振興を図るため、立命館大学において「白川静記念東洋文字文化研究所」を開設いたしましたのが昨年の五月です。開設の際には、先生に本研究所運営のために多額のご厚志を頂戴いたしました。深く感謝申し上げます。

本研究所は、先生の東洋文字文化研究の偉大な成果を基盤に、大きく二つの役割を担います。まず、東洋文字文化に関する普及活動を行います。白川先生による講演会の実施、著作など研究成果の出版とその頒布、東洋文字文化に関する研究成果の内外への紹介など、広く一般を対象にした普及活動を行うとともに、小学校から中学校・高等学校、そし



開所式での長田豊臣研究所長

つている各附属校の教員にも積極的に参加していただいております。

白川先生は、戦後の当用漢字の制定を始めとした政府の国語政策の貧しさをよく批判されます。そしてその考察は日本という枠を越え、韓国におけるハングルやベトナムにおけるクオックグー（ローマ字表記）など東アジア全体に及んでおられます。近代まで東洋の共通文化であった漢字は、現代になり徐々に失われつつあります。漢字は東洋文化の基盤です。本学は立命館孔子学院の開校、ベトナムやインドネシアなどとの人材育成に関する国際協力など、中国、東南アジアなどいわゆる「東洋文化圏」との交流に長年力を注いで参りました。漢字文化を端緒とした東洋文化の復興、そしてアジア・太平洋地域の平和と安寧へと続く理念は、本学園の掲げる理想と一致いたします。

先生の東洋文字文化に対する高いお志に適うよう、全学の力を傾注する所存です。関係者の皆さまのご指導、ご協力をお願いしたいと存じます。

て大学・大学院という立命館が持つ教育現場にも、直接活かして参りたいと考えております。

「白川研究所便り」の発行にあたつて

副研究所長 木村 一信

この度、白川静記念東洋文字文化研究所の「便り」を発行することになりました。研究所が白川先生をはじめ、学園関係者他、多くの人々の尽力と協力とによって発足して以来、一年近くの時間が経とうとしています。この間の皆様方のお力添えに対しまして、心より感謝申しあげます。

すでにご存知の方々も多いと思いますが、当研究所は、白川静先生の長年にわたりますすぐれた「東洋文字」研究を基盤にすえ、その学問の継承と発展とをめざすために設立されました。もう少し具体的に申しますと、漢字を中心とした「東洋文字」学のさらなる研究推進のため、学術に寄与するための諸活動を繰り広げていくこと、これが一つの目的です。また、「東洋文字」学の啓蒙と普及とに関わる諸活動をすすめること、これが二つ目の目的として挙げられます。

この約二十年間、IT技術の進展とその浸透、習熟は、予想もつかないほどの勢いでもって全世界を席巻してきました。研究の分野、教育の分野はもとより、企業やビジネス、さらには日常生活の面においても「パソコン」をはじめとするITに関わる機器が駆使されています。それに伴つて、文字そのもの、あるいは文字を書いたり、読んだりすることが大きな変容を見せはじめています。おそらく、あとから振り返つてみれば、この「IT革命」と呼ばれる現象は、ここ数世紀中でも特記される事項となるでしょう。

文字とは一体、何なのか。「東洋文字」という最も歴史的・伝統的な

存在であるこの文字は、今後、どのような位置を示すのか。もちろん、いくら技術が進歩したとしても、文字の役割は、さらにその重要度が増しこそそれ、減じたりはしないでしょう。

メールの発信、着信という行為を通して、若者たちは、これまで以上の文字によるコミュニケーションを連日、行なっているのです。意識するにせよしないにせよ、そこでは文字は、より使用の頻度が高まっています。

こうした時代にあって、「東洋文字」とそれと比較、対照するべく世界の各地で使われている文字（アルファベット文字やハングル文字など）の意味を探求する活動は、きわめて重要なものがあると言えるでしょう。

文字というものが、時代や社会の情勢に応じて変化するものだという、あたり前の歴史的事実をあらためて思いおこしたいと考えます。文字は、いわばその時代・社会の文化を最もよく表す役割をおつていて、とも言えるでしょう。

研究所を構成するスタッフ（研究員、顧問といったメンバーも揃いました。これから本格的に、白川先生を中心とした「東洋文字文化」の研究とその普及の活動にとり組んでいきたく存じます。皆様方のさらなるご支援をお願い申し上げます。

（文学部長）



前列左より清水凱夫研究員、木村一信副所長、本田治研究員
後列左より深谷圭助研究員、小森伸子研究員、芳村弘道研究員、上野隆三研究員

白川静記念東洋文字文化研究所の 研究活動予定について

研究員 上野 隆三

白川静記念東洋文字文化研究所の今後の研究活動予定についてお伝えしたい。当研究所はその名の通り「東洋文字文化」を研究する目的で設立されたわけで、漢字に関する研究が中心となる。しかし、白川先生のご研究が、漢字学だけでなく広く中国文学あるいは中国哲学、さらには中国・日本の文化にも及んでいるのとおなじように、「東洋文字文化」が指示示すものは漢字学という枠にはとらわれない幅の広いものであると思われる。当研究所における研究も将来的にはどんどん幅広いものになっていくであろうと考えている。

さて、現在計画されている研究テーマのうち、ここでは「二十世紀以降の東アジアにおける漢字研究の総合調査」について詳しくご紹介したい。この研究テーマは、甲骨文の発見・研究や金文研究の本格化により、二十世紀以降めざましい発展を続けて来た日本・中国・台湾・韓国等における漢字研究の成果を詳細に調査し、その情報をデータベース化して広く内外の学者の利用に供しようというものである。今回の計画は、漢字の字形的側面からの研究を中心とした文字学の分野を中心に据えて研究情報を集成しようとするものであるが、内容を勘案して音韻・訓詁の学問領域や字書・辞典、書道芸術にまで情報の範囲を広げてゆきたないと考へている。二十世紀は漢字教育・行政の分野においても、大変革の時期で、東アジアの漢字文化は大きく変容した。日本では当用漢字が、さらに現在は常用漢字が用いられている。中国では簡体字が制定さ



研究所内の蔵書

また東洋文明共通の文字であった漢字に生じた変化や各国の現状について認識を深める機会を設け、漢字教育・行政の分野に関する情報をも収集することは、きわめて重要かつ有意義なものであると考える。この研究は当研究所に所属する複数の研究員が中心となつて推進していく予定だが、他の研究機関等の教員・研究員の皆様のご協力なくしては達成できないことは明白である。この場を借りて、ご協力のお願いを申し上げたい。

当研究所には多彩な研究員が所属しているので、「手書き電子教材を用いた漢字自学システムの研究」、「日本語書字につながる描線産出の習得過程に関する研究」といったこれまでの漢字学のイメージをはるかに超えた研究も計画中である。そして最初にも記したように、今後はさらに幅広いものに発展していくものと思う。今後の当研究所の研究活動にどうぞご期待を。

(文学部教授)

れて用いられ、若者の中には本字（繁体字）を全く知らない者もどんどん増えている有様である。さらに韓国では金大中政権以降多少緩和した感があるものの、極端に漢字の使用が抑えられており、

北朝鮮も同様である。ベトナムでは漢字は排除された状態になつていて、このような状況の現在、漢字文化圏の研究者との交流によって、研究情報の相互緊密化をはかり、

白川研究所の文化事業活動について

副研究所長 高 杉 巴 彦

当研究所の文化事業活動は、研究所名誉所長である白川静先生の多年にわたる優れた研究成果をその基礎とし、「東洋文字文化」に関する啓蒙・普及活動をすすめるものであり、教育・出版や研究・普及活動者への奨励などの文化事業を、広く社会を対象に展開することを目的としている。

漢字を中心とする東洋文字は、各時代の人間社会の営みとそこから生み出された習俗・信仰・文化の表象であり、時代性・社会性・歴史性を強く映し出すものである。とりわけそれによって醸成された東洋文字文化圏は、長い間の東アジア交流と相互文化融合の中で、单一の原理主義とは異なる文化を熟成してきた歴史がある。東洋文字文化はこれからも日本および東アジアの精神的支柱であり続け、その振興には重要な意義があると考へる。日本社会・文化の継承と発展、東アジアの平和と繁栄のために、「東洋文字文化」の啓蒙・普及活動を担う当研究所の文化事業は重要な役割をおつてているといえる。

さて現在、「立命館白川静記念東洋文字文化賞（略称「立命館白川静賞」）」と「白川文字学に基づく教材制作」という二つの事業が、文化事業運営委員会のもとに始まっている。

「立命館白川静賞」の事業は、東洋文字文化の分野における有為な人材を奨励支援するために、功績のある個人および団体の業績を表彰し、副賞として奨励金を交付するものである。学内外の研究組織等に候補者の推薦を依頼し、推薦されたものの中から選考委員会を経て受賞者を決定するもの。第一回立命館白川静賞の表彰式は、五月を予定している。

また「白川文字学に基づく教材制作」については、立命館の総合学園としての特色を生かした展開を進めていく。白川文字学に基づく、社会を対象とした文化事業は、すでに他団体による講義の実施や、児童・児童向けの教材の刊行がなされている。当研究所では初等・中等教育機関を擁する本学園の特色を生かし、附属小学・中学・高等学校の教諭との連携による児童・生徒向け漢字学習教材の開発に着手した。

白川名誉所長は折に触れ、「消化されない今まで、ただ暗記せよといふのであるか。そのような無機的な記憶が、知識となりうるのであるか。なによりもあてがわれただけで満足し、それ以外を余分のこととする教育が、人間を規格化することは確実である。（『回思九十年』平凡社）」「漢字はその構造を理解することによって、記憶も容易となり、適確に使用することもできる。：漢字の理解を、国民教育の場において一般化することが、私の切なる願いである。（宮下久夫『分ければ見つかる知つてゐる漢字』白川序文 太郎次郎社）」など、暗記ではなく理解をさせる系統立った漢字教育の必要性を強調している。



教材制作委員を務める附属校の教員

立命館小学校では、基礎学力形成の大きな柱の一つとして、漢字の授業が毎日行われる。また中学校・高等学校各附属校でも、「表現力」「生きる力」といった人間形成に欠くことのできない要素として、文章表現能力や読解能力の養成に力を入れている。その礎となるのは、語彙力・漢字力である。白川文字学の成果と附属校での実践を結合させた教材を開発し、ゆくゆくは、立命館式漢字教育法の確立を目指している。

（常務理事）

説文学と白川文字学

白川 静

まれる文身の習俗を見出すことは困難であろう。それは環太平洋諸民族の原始社会、古代社会の中に残されている、極めて顯著な習俗の一つである。

私の文字学が、従来の文字学、たとえば今まで経書的な権威をもつとされていた説文解字の字形解釈とどのように異なるのか、そのことを一おう判り易い形で説明してほしいと希望される方が多く、そのような書を用意してはどうかという話があつた。私のいわゆる三部作、字統・字訓・字通、また常用字解の字説には、その都度説文解字の字説を紹介し、私の字説と対比すると、いう形式を執っており、一字一字の対応については、その都度に解説を加えている。しかし私の字書はすべて五十音順の配列をとつており、それで例えば載書関係（曰・曰・哉等の要素を含む文字）、農耕関係（力・ム・辰等の要素を含む文字）などの系列字について、説文は一貫してどのような説明を与えていたのか、私の字説において、それはどのようにとり扱われているのかという関係を、統貫して記すことは困難であった。また文身の習俗について、あるいは媚蠱びの（まじない）の俗について、その関係文字の解釈を、その関係文字を集めて対比するということは困難であった。しかしそのことが必要であることはいうまでもない。

説文解字と私の文字学とを比較するのには、そのような問題について、統貫してその解釈の妥当性を検証するということが、極めて必要な方法である。しかしそれは、古代社会の生活の中に、文身の習俗があつたとする認識があつて、はじめて文字形象のうちに文身の習俗を発見することができるが、そのような認識がなくては、文・辛系統の文字に含



研究所での白川静先生

のことからも知られるように、古代に成立した文字に対する理解には、古代社会に対する種々の知識が必要である。すなわち「古を以つて古を解する」という態度がなくては、その文化の中で成立した文字のもう一つ形態も、意識内容も理解することは不可能である。そのためには必要と思われる相当項目を設定し、その範疇の中に含まれる古代文化的な事実について、一定の観念のもとに文字としての形象が与えられているものとして、一定の理解のしかたが可能であるということを、検証しなければならない。例えば王の儀器は玉座の前に据えられる大きな鍔頭えつとうの儀器であった。その儀器の上に玉飾を加え、その光が上方に放射する形は

皇であった。戦士階級は小さな鉢頭を儀器とし、その士としての身分を示した。しかし説文は、「天地人三才を貫く者は王である」「自は始め、始めて王たる者は皇である」「十を推して一に合するを士と為す」など、すべて許慎の時代の思想、その時代の合理性を求める精神によつて、最初の時代に成立した字形の解釈を試みようとしている。これは「今を以て古を解する」も

ので、古代文字学として採るべき方法ではない。

許慎の当時、文字が成立した時代の古い形態を遺存する文字資料は、殆ど知られていないかった。文字が成立した時代の甲骨文、また殷末以来、西周期にわたつて豊富に作られた青銅器の銘文、これらの資料は、當時殆ど地下に埋藏され、あるいは墓壙の中に深く蔵されていて、殆んど地上に姿を現わすことはなかつた。偶々

器が流出することがあつても、これを解読することは殆んど不可能であつた。秦の始皇帝が天下の文字統一を行なつて、六国の古文も滅び、文字は僅かに秦篆のみが残されていた。



白川静『字通』より



(白川静『金文通釋1上』 員父作
寶障彝)

秦は周の故地に拠つた国で、秦篆にはなお周の籀文の遺意も残されてゐたが、しかし許慎が資料としたものは、殷・周の時代を去ることすでに遙かに遠く、多くの青銅器銘文に見える彝の字形も、かつての雞を羽交い絞めにした形はすでに失なわれ、字の中心は米と糸とに変化している。このように変化した文字資料によつて、文字成立当時の時代の意識をたどることは、もとよりすでに不可能であるといわなければならぬ。

また仮に、彝が雞を羽交い絞めにする形であるという字形解釈を為されたとしても、どうしてそのような行為を示す字が、金文の例語として「寶障彝を作る」という定型の文として記されているのか、彝という字のものそのような構成が、青銅器の製作とどのような関係をもつのかについては、別に新たな知識を必要とする。三代吉金文存を編集した羅振玉は、もとよりこの字形が雞を羽交い絞めにする形であることを理解したが、「其の誼（義）は則ち知るべからず」といい、不可解としている。これは中国の古い時代に、器物や造営物が作成されたとき、血を以てこれを潔清するという饗の儀礼について、羅振玉が迂闊であったためで、饗礼のことは孟子梁惠王上に、斎の宣王が、堂下を牽かれてゆく牛がいかにも物おそれするさまであるのを見て、「牛、何くに之く」と問い合わせる者がある。羅氏がこのような文章を知らなかつたはずではなく、ただこれを古代における饗礼の一として、古代民俗の一として理解していなかつたことである。古代文字の十分な理解のためには、古代社会の理解、その社会生活を支配した種々の觀念についての理解が必要である。

甲骨文・金文が現わされて以来、その集録・考証のことも多く試みられ、集証の類もかなり備わつてゐる。しかしそれらは、羅振玉の考証にみられるように、古代学的な用意に欠ける、甚だ不用意なものであつ

た。私はさきに説文新義十六巻を通じて、既存の文字学研究に対する批判研究を試み、その得たところを以て、字統として自説を提供した。

すでに古代文字の資料が十分に提供されているに拘わらず、古代文字学がなお十分な基礎をもちえなかつたのは、古代文字を今の世界から眺めるだけで、古代社会に立ち戻つて、その時代の意識を以てこれを観るという視点が用意されていなかつたからである。そのためには古代の民俗、古代社会的な諸觀念について、東西の古代社会研究、未開社会研究の成果などが、十分に利用されなければならぬ。古代文字は、古代人の意識の中で生まれた。彼らの生活は、その意識のもとに営まれており、その意識を理解することがなくては、古代人の生活はすべて非現実的な、理解しがたいものとなるであろう。しかし彼らの意識形態について十分な用意を以て臨むならば、彼らの生活や思考法は、それ自身の体系性をもち、妥当性をもち、必然性をもつものであることが理解されるであろう。「殴^う」という単純な行為が、民俗学的にどのような意味をもつかについて、その意味を知るならば、殳部二十字、支部七十七字の解釈について、改めて見直すべき字が甚だ多いのである。古代人の行為の全般についても、それにふさわしい理解のしかたを用意することが必要であることは、容易に理解されるはずである。

殷代の文化は東アジア的な沿海文化であり、わが国が文身の俗をもち、子安貝を宝とし、汎神論的な世界觀をもち、靈魂の不滅を信じ、媚蠱をおそれ、呪的な世界觀をもつことにおいて、両者の古俗には極めて親近性に富むものがある。またわが国には古俗の存するものが多く、それらは柳田国男、折口信夫などの先覚によつて遍く検査され、整理記録されており、古代社会の研究にそのまま役立つものが多い。また西欧人が東方開拓の時代に残した原始社会、古代社会研究の報告書も多く残されている。古代社会的な意識のあり方を、ある程度体系づけることは、今ではあまり困難なことではない。

問題は、文字成立当時の資料がすでに備わる上に、その当時の意識の

形態にまで遡る準備が、研究者においてどれだけ用意されているかということであろう。もしこのような方法論的な用意が準備されるならば、中国の古代文字は、何びともその門戸を開き、自由な解釈を可能にするであろうと思う。許慎の誤りは、古を解するに今を以てするというところにあつた。古代文字の世界に導入することを拒むものは、常にこの「今を以て古を解する」という誤った方法にある。もし「古を以て古を解する」という方法論的用意を以て臨むならば、古代の世界は豁然として、目前にその躍動する姿態を現わすであろう。

このような問題を明確にするために、私はまず文字をそれぞれの生活の分野、意識の分野ごとに区分し、そこに働く共通の觀念の下に、文字がどのような方法で構成されているかを見ようと思う。例えば天象、気節、方位、身分、教学などの各分野に関するものを約六十分野とし、各分野の文字構成を通じてその意識形態の上から文字の構造的な特徴を追迹するという方法である。

第二には、共通の文字要素をもつ一群の文字について、これを統貫する基本的な要素と、その展開の上に成立する文字の系統法を発見するという方法である。例えば不・丕・否・音・剖・部は、草花の成熟過程として系統的に理解しあるものであるが、丕を「鳥飛んで地に至らず」とするような理解のしかたでは、これを系統的な文字の系列として理解することはできない。緒を「糸に従ひ、帝の聲なり」としても、なぜ帝の声が締める意をもちうるのかを説くのでなければ、文字の字形学的研究として内容をもつことはできない。説文解字はこれらのことについて、何の解決をも与えていない。

私は近く世に問う一書において、この二つの方法を用いて、文字の形体学的研究の実際を解説したいと思う。なお機会があれば、その試論的な方法について発表の機会を得たいと考えている。ただ今私が考え、進めている作業について、一おう予報的な報告をしておく次第である。

展観 「白川静の世界」

研究員 芳 村 弘 道

—二〇〇五年十一・十二月開催の「白川静と立命館展」より—

本学の図書館開設百周年と当研究所発足を記念し、二〇〇五年十一月から十二月にかけて、福井県立図書館（十一月十五日から二十三日）、本学衣笠キャンパス（十一月二十八日から十二月六日）、びわこ・くさつキャンパス（十二月九日から十七日）において「白川静と立命館展」が開催された。その展観のうち、「白川静の世界」と名づけられた衣笠キャンパスでのコーナー展示のあらましについて、ここに報告申し上げる。

衣笠キャンパスでは、以学館地下多目的ホールが会場となつた。展示品は、白川静先生が受けられた文化勲章・勲記、文化功労者顕彰状に始まり、見る人に改めて先生の学問の偉大さが深く印象づけられた。また、展観開催を前にした十月十五日に京都市名誉市民の称号を受けられたが、その表彰の品も陳列された。

コーナー展示は、白川先生の学問世界、また教育・研究者としての足跡など、部門別に構成され、解説を付した数々の資料が列せられた。第一部は「甲骨・青銅器資料」である。甲骨片や青銅器の複製品が並べられた後ろの壁面には青銅器の雄品として知られ、かつ金文資料として最長の銘文を誇る毛公鼎の原拓本が掲げられた。これは、先生が一九七二年に台北の故宮博物院に行かれた際、同行の樸社（先生の金文通釈・説文新義の講義を受けられた好学の士の集まり）の方が採拓されたもので、当研究所開設を祝つて、散氏盤の拓本とともに寄贈くださった品で

第二部は「漢字の世界」である。白川先生は甲骨文や金文の研究を進め、漢字の原初の形にこめられた古代人の思惟を解明し、体系的な独自の文字学を築かれた。ここには白川文字学の基盤になつた書籍・資料のいくつかが展示された。その一つが後漢の許慎『説文解字』（清の朱筠刊本）である。本書は久しく漢字研究の聖典と目されたが、甲骨文や金文が見られるようになつた今日からは、その説解には甚だ問題が多いとして、先生は『説文新義』を著して漢字解釈を一新された。このほか先生が文字研究の基礎とされたト辞拓影の精密なトレースが、底本となつた羅振玉『殷虚書契前編・菁華』などと併せて展示された。金文研究書



衣笠会場の毛公鼎拓本を解説される白川静先生

では羅振玉『三代吉金文存』、郭沫若『両周金文辞大系』があつた。後者に対し、白川先生は図版の模写や一字索引を作成している。また古く宋代に編纂された青銅器図録『宣和博古図録』も参考に展示された。この本は本学図書館収蔵の漢籍善本の一つで、明嘉靖七年（一五二八）ごろ出版の大型本である。

続く第三部は、白川先生の学問形成に影響のあつた書籍や人物を紹介する「修学時代」である。先生は十代の頃、広瀬徳蔵衆議院議員の事務所に勤められたが、その当時に読まれたダントン『エイルキン物語』や幸田露伴『幽秘記』といった文学作品のほか、「東洋」に関心を抱かれる契機となつた岡倉天心『東洋の理想』、中国文学の世界に親しまれるようになつた『国訳漢文大成』などの展示がなされ、先生青年の頃の愛読書が知られた。また、学問の道に進まれてから影響を受けることが大きかつた清朝考証学の書『經義述聞』、文字学の新展開を示した吳大澂『字説』、近代の古代中国学を開拓した王国維『觀堂集林』も見ることができた。なお、ここには広瀬議員の昭和三年の選挙ポスター（法政大学大原社会問題研究所蔵）が張られてあり、興味深かつた。

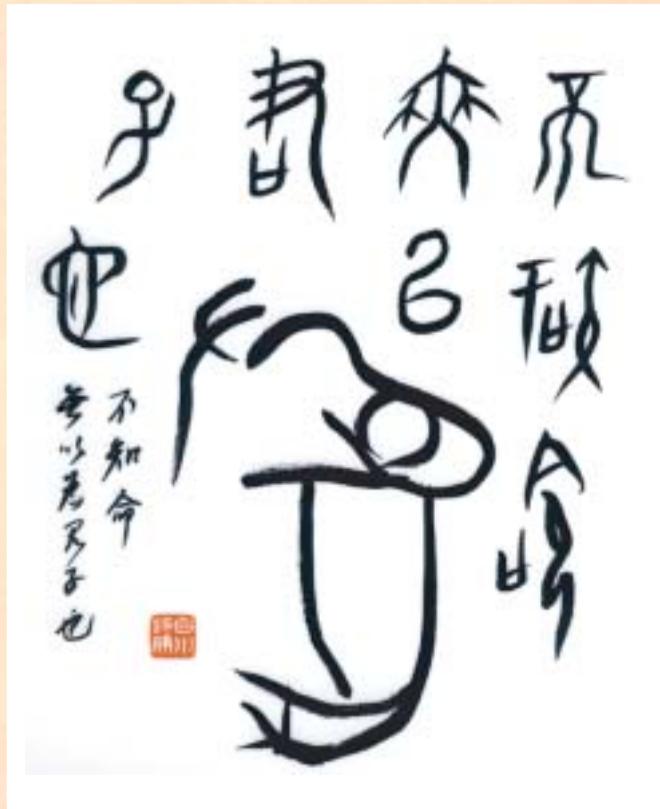
第四部「教育者としての白川静」には、戦前に立命館中学で教鞭を執つておられた頃の授業風景や大学での講義の模様などの写真パネルが並べられたほか、先生が編纂・執筆された教科書・講義案が展示された。そのうちの『新修高等漢文』（一九五六年三月）は戦後的新カリキュラム用の漢文教科書である。先生は新しい教養としての漢文教育の樹立を目指し、これまでにない単元方式の教科書を生み出された。この編集方式は、その後に続く各種漢文教科書の模範となつていている。卷二付録の「文字の話」は、文字学への導入的内容が記された最初の文章として、極めて意義深い。

第五部は「研究者としての白川静」である。先生が最初に世に問われた論文は「卜辭の本質」（一九四八年一月「立命館文学」六二号）であるが、その後、陸続として発表された研究成果のなかの主要な論著が系

統立てて紹介された。第一に甲骨・金文学の分野の『甲骨金文学論叢』『金文通釈』、第二に文字学の『説文新義』、第三に詩経学の『稿本詩経研究』『興の研究』（学位論文）。先生は民俗学・歴史学・社会学・比較文学など広い視野をもつた画期的な研究方法で、古代歌謡としての詩篇を解釈された。また先生の詩経学は、『万葉集』研究に志されたことに発しており、東洋世界に対する理解の一環でもあつた。主に柿本人麻呂の挽歌を分析し、「短歌の本質は儀礼における鎮魂・魂振りとしての、呪歌であった」と指摘する『初期万葉論』、旅人・憶良・家持らの歌を中心分析し、七夕論や表記論などについて論ずる『後期万葉論』も展示された。原稿類の陳列もなされ、先生の学問が見る者に迫るような思いがした。

第六部の「中国・台湾の研究者との交流」には、清朝考証学の最後の繼承者といえる楊樹達氏、また屈万里・張秉權・杜正勝・楊寬といった方々からの贈呈本や翻訳本が数多く陳列され、これらを通して先生との学術交流が理解できた。第七部「知の発信者」をもつて本展示は終わる。先生が一般向けに出版された書籍は岩波新書『漢字』（一九七〇年）を最初とするが、以来、出版される書籍のいずれも江湖の評判を得られていることは、ここに贅言を要しまい。「詩経」「孔子伝」「中国の神話」「中国の古代文学」「中国古代の文化」「中国古代の民俗」「字書三部作」「字統」「字訓」「字通」「常用字解」「桂東雜記」三巻、『白川静著作集』が展示の机に並べられ、先生の学問の大ささに圧倒されるとともに、弥が上にも景仰の念が深まつた。

こうした展示に併せて、向かいの会場には白川文字学の解説コーナーが設けられた。パネル解説の他、ビデオ説明の設備が用意され、目と耳から分かりやすく理解できる工夫がなされ、観覧者の興味を高めていた。また、この部屋には、甲骨文字による書法芸術の創作を善くされ、白川先生と交流のあつた欧阳可亮氏の作品も多数展示された（氏の作品は当研究所に寄贈されたものである）。



○当研究所が行う研究・文化両面の事業を学園の内外の方々に広く知つていただこうと、この小冊を発刊することになりました。年二回の発行を予定しております。開設間もない研究所で、すべて縦についてたばかりであります。事業活動の内容について御理解を得て、永く御協力と御支援を賜りたく切に願つております。小誌の御高覧も何卒よろしくお願いいたします。

編集後記

○白川先生の「挨拶」にも言及された昨冬開催の当研究所開設を紹介する記念展示会の報告が芳村弘道研究員の「展観「白川静の世界」」です。文中の写真は衣笠展示の初日に来観された白川先生のお姿です。また上掲の図版は、先生が甲骨文字で『論語』堯曰篇「不知命、無以爲君子也（命を知らざれば、以て君子爲ること無きなり）」の一節を揮毫されたものです。その複製が参観者の記念品に渡され、好評を得ました。

○白川先生は本年四月で九十六歳を迎えられます。お生まれ歳、八巡の華誕も近く、この誌面を借りて益々の御健勝をお祈り申し上げます。